南 MINAMI

地域全体でまちの安心を

2019年10月、新たな駅名でスタートした南町田グランベリーパーク駅。駅を出て国道16号を渡ったすぐ先にある南第1高齢者支援センターで、開田響子さんは働いている。日々、高齢者の日常生活に関する相談や、介護に関する相談を受けるのが主な仕事だ。とりわけコロナ禍の昨今、感染を恐れて外出や通院を控え、会話も減り孤立している高齢者が増えているという。そんな中、発足したのが「南あんしんプロジェクト」。発起人の町野眞里子さんに話を聞いた。

「私は民生委員として家庭訪問する中で、世帯として心配なケース、いわゆる8050問題等が増えていると気づいたんです。問題が見つかったとしても、その背景には複雑な家庭の事情などが絡んでいるわけで、問題の全体像を捉えなければならないと強く思いました。ところが行政は縦割りで、対象者ごとに利用できるサービスが違う。そこを何とかしなくてはいけないと思ったのが、プロジェクトを立ち上げた理由です。」

このプロジェクトでは、児童・障がい・高齢者の分野を超えて、各分野が抱える課題を話し合うワークショップを行うほか、関係機関をネットワーク化している。「自分が関わってきた高齢者福祉以外の分野について学ぶことが多い。それぞれの分野の方々が関わることで安心感がある」と開田さん。「南地区内でもエリアごとに問題が違います。それぞれのケースに寄り添い関わることでわかることがある。1人でも多くの困っている人を救いたい」と町野さんは決意を語る。

折しも、行政側も分野に捉われない相談体制として、「縦割り」を解消した地域共生社会を築こうとしている。それに先駆けて地域主導で始まった「南あんしんプロジェクト」は、間違いなくそのリーディングプロジェクトになるはずだ。

1 南第1高齢者支援センターの開田響子さん。
2 町野眞里子さん。誰もが安心して暮らせるまちへの想いを語る。

相原 AIHARA

昨年度に実施したおしゃべりクッキングの様子。

地元相原のみんなが集う温かい居場所

ＪＲ横浜線相原駅のすぐそば、町田街道沿いにその場所がある。子どもと高齢者をつなぐ多世代交流の場づくりをしている武者直美さんの自宅で、「スターキッズ」の拠点だ。生まれも育ちも相原という武者さんは、地元の高齢者の方々の「集まる場が欲しい」という声をきっかけに、自宅の1階部分をリフォーム、多世代が交流する地域に密着した居場所づくりを始めた。

「『スターキッズ』とは、いつまでも子ども心を持ち続けていたいという願いを込めて名付けました。大人も子どもも、楽しく笑顔で、皆が星のように輝き合って、地域のつながりを作っていけたらと思っています。」スターキッズでは、けんこう麻雀や料理教室、子ども向けの工作教室、法政大学の学生と高齢者の交流カフェなど様々なイベントを実施している。「交流カフェ『ふなで』では、学生が夏休みに旅行した日本各地の映像を見せながら話をしていると、たまたまその場所が居合わせた高齢者の方の故郷で、昔話に花が咲いたりする」と武者さん。これらのイベントは、地元の方が一緒に考えており、定期的に開催される企画会議は彼らの生きがいにもなっているという。

「毎月実施している簡単料理教室は、集まった方全員が先生になって、持ち寄った料理のレシピを教え合っています。皆さんとても物知りで、自分もまだまだ知らないことを教わっています。」地域のみんなで交流の拠点をつくっているスターキッズ。武者さんは「これからも子どもから高齢者までが、気軽に立ち寄れる居場所であり続けたい」と、優しく笑った。最初は名前も知らず何となく顔見知り、そこから何度か会ううちに交流が始まる。コミュニケーションが自然と生まれる場所が、そこにあった。

1 手作りの麻雀卓。現在は休止しているため、次にイベントが開催される時を待つ。 2 卒園式のためにスタッフで企画したコサージュづくり。直接会えない今、心を通わせることができる素敵な贈り物だ。